放課後の理科室

シリウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後の理科室

【Ｎコード】
Ｎ０１４５Ａ

【作者名】
シリウス

【あらすじ】
ある日、ヒカルの事を話をしている友達の話を聞いてしまい、ヒカルの事が好きだとあらためて思う

放課後の理科室

「ね、進藤ってさ」

不意に出た名前に、あかりは心臓を跳ね上がらせた。

「進藤って、あかりの幼馴染みなんでしょ？」

「そうだけど」

できるだけ、呼吸を乱さずに、表情を変えないように答えた。友人に他意は無いようで、あかりの顔もろくに見ず続けた。

「昨日、親戚のおじさんがうちに来たんだけど、進藤の話したら、サイン貰ってきてくれ、なんて言うのよ」

へえー、なんて、周りの友人たちも声を上げた。ただそれだけの事に、誇らしい様な、それでいてなんとも言えない寂しさが風の様に胸を吹き抜ける。

「でもホラ、別に1年の時同じクラスだったってだけだし、別に仲良いわけじゃないから頼みづらいのよ。ねえ、あかり、進藤にサイン貰ってきてくれない？」

「・・・・」

あかりは戸惑って、目を泳がせ、唇を引き結んだ。こんなことは初めてではない。しかし、同級生の、女の子に言われたのはこれが初めてだった。

「ダメ？」

「う、ううん。いいよ」

「本当！ありがと！！」

余りに嬉しそうに言われて、また心がざわりとする。

「で、でも、ヒカル忙しいから…無理かもしれないよ」

最後は小さくなってしまった声に、何かを悟られないかと、また嫌な汗をかいた。

「いつでもいいよ。急がなくても。次おじさんが来るのも、いつになるかわからないもん」

気まずさに黙り込むと、別の友人が思い出したように目を輝かす。嫌な予感がした。

「進藤ってさ、1年の頃すっごいお子様だったのに、最近すごい大人っぽくなったよねー。なんか、声掛けづらいもん。結構、気にしてる女の子多いし。あかり、進藤って、誰か本命いるの？」

「え・・・」

急に水を向けられて、無言で頭を振った。

ヒカルが最近急に雰囲気が変わったのに気付いているのは、自分一人じゃないのだ。

その事実に、あかりはひどく苛つく。独占欲だろうとは、理解して

いる。
本命なんて、私が知りたい。
「そっか、あかりも知らないのかー。でもさー、案外もう彼女いたりして」
年上だよ、きっと。
そんな余計な想像までしてくれた。あかりはわけもわからず泣きたくなった。

放課後の理科室。
今日はたまたまメンバーが集まらず、囲碁部はお休みということになっていた。
あかりは、窓際の机に突っ伏し、横で心配そうに久美子が覗き込んでいる。

「久美子は…」

くぐもった声で、あかりが顔を向ける。目が潤んでいた。

「久美子から見て、ヒカルってどう思う？」
「どうって…」
「だから、お子様だとかわがままだとか自分勝手だとか」
「あかり？」
「…大人っぽくなったとか、優しいとか…かっこいいとか」
また顔を埋めて肩で大きく息をした。
「馬鹿みたい、私」

「あかり」
「ヒカルがどんどん遠くに行っちゃうのに、ヒカルの一番近くにいるのは私だって思い込んでた」
切ない声音で、あかりは独白のように呟いた。ヒカルの顔が脳裏に浮かぶ。その顔は、どこか遠くを見つめているようで、以前は真っ先に浮かんだ屈託ない幼い笑顔ではない。このところ、あかりは彼の笑顔を見ていなかった。
久美子は目を細めて、
「あかりが一番近くにいるよ」
「嘘。遠いよ。わかんないもん…ヒカルが何考えて、誰と一緒にいるのか、全然知らないもん」
「ううん、わかるよ。進藤君、あかりといるの、すごく楽そう。女の子で、そんなのあかりだけだよ」
久美子の言葉に、あかりはぐんと上体を起こした。眉根を寄せている。夕日に赤く照らされたあかりの顔は真っ赤だった。
「女として見られてないのよ、そんなのは！」
久美子は苦笑する。そうかもしれない。だけど、あかりは彼の心に居場所がある。それだけは確かだ。
「大丈夫よ、あかり。あかりが好きでいれば、進藤君と離れないよ」
「離れないわよ。言われなくっても！！」
ついにあかりは泣き出した。
久美子にしてみれば、あかりだって十分男の子にモテるし、進藤ヒカルは果報者だと思う。泣きじゃくっているあかりの頭を、子供を

あやす様に撫でながら、二人とも、大概鈍いから先が思いやられるな、と目を閉じた。

それからしばらくして、夜、上機嫌なあかりから電話があった。

『でね、ヒカルが自分から誘ってくれたの。久しぶりにヒカルの部屋に行ったんだけど、全然変わってなくて、碁盤とか囲碁の雑誌がその辺に置いてあるのよ。勿論対局したんだけど、ヒカル、指導碁うまくなってて…』

ベッドで眠い目を擦りながら、久美子はその晩遅くまであかりに付き合い、翌日危うく遅刻しかけたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0145a/

放課後の理科室

2011年3月28日16時39分発行